

rgb⁺ exhibition vol.2

東京造形大学絵画専攻助手 展

原田 郁／平嶺林太郎／木下直耶／村上真之介 4名による研究発表展を開催いたします。昨年に引き続き 2回目となる [rgb⁺ exhibition] はメンバーを 3名から 4名に、また今回は、タブロー・インスタレーション・版画・映像作品と四種四様それぞれの表現形式で構成されます。

[rgb] とは光の三原色です。[red/green/blue] の三色の色光はその組み合わせであらゆる色調を作り出すほか、混ぜるほどに明度が増しエネルギーが高まります。そのエネルギーの高まりは、本展の作家それぞれの表現の響き合いで高められる作品のようでもあります。

この私たちの作品が新しい時代・今に焦点を結び、表現と創造の可能性を示す光になることを願いながら、時代性やそれぞれの独自性を [+] した新しい表現をこれからも探求していきます。

会期	二〇一〇年十二月七日(火)～二十一日(水)
開館時間	午後十時～午後五時
休館日	日曜
企画	ZOKEI Gallery (大学院棟十二号館二階)
お問い合わせ	TEL: 042-637-8423 FAX: 042-637-8110
アクセス	JR 横浜線相模原駅 東口 → 大学 所要時間：徒歩15分 / 車 5分
※ 詳しくはホームページをご覧下さい。 http://www.zokei.ac.jp/	

「rgb⁺ exhibition vol.2 2010」に寄せて

光の三原色であり、本学のスクールカラーでもあるところからの命名である [rgb⁺] 絵画専攻の助手、原田 郁、平嶺林太郎、木下直耶、村上真之介の4人の展覧会が開催される。

色彩は相対的である。すなわち単独で固有の特性を保持するのではなく、外部との関係のなかで活動する運動体である。その色彩の有機的性格は絵画を豊かな運動体とするが同時に色彩を生きる画家に困難を強いるのである。

ところでニュートンの近代科学の反駁として、主觀性をとり戻そうとしたゲーテは『色彩論』を著し、〈高昇〉の概念を打ち立て、黄と青を分極性のなかに捉えその両者が結びつくことで、真紅= Purpur が現出されるとしたのである。その理解は顔料の混合による色彩創出の実践の場にいる画家にとってきわめて難しい。が、その「高昇」にカント以降、美術に求められ続けている〈超越〉の概念をも重ねることも可能なのではないだろうか。

ギャラリーでは 4 作家が造形大絵画アトリエで長時間共に過ごすという偶然を超え、それぞれの独自のテーマとして追究される作品が、他の出品作家の作品を外部として捉え直すことをとおして新たな意味と関係を生成することとなる。

原田 郁は PC 内に彼女が製作した 仮想空間の街の風景／リアリティ をモデルにアクリル絵具で描出する「GARDEN」シリーズを展開してきた。そこで観者は絵の中に二重に重ねられた リアリティ／像 を見ることになるのだ。今回は最近手掛け始めている「HOUSE」シリーズの発表である。

木下直耶はフラジャイルな微妙な色調の差異によって像が浮かび上がるリトグラフを制作している。その像は繊細で穏やかな第一印象とは裏腹にインターネット上で採取された戦争や事件などの衝撃的な画像だという。それらの画像は彼の手をとおしてリアリティが剥奪され、画／プリント像として僕らの前に静けさと共に現れる。ここでも作者はリアルから遠くに位置取りをし、リアリティ／バーチャル な世界を対象としている。

一方、平嶺林太郎の活動は彼が主宰する郷里、島嶼「KOSHIKI ART PROJECT」に見るような生身の人間的活動／リアルの中にあるようにも見える。会場内に設置される 4 つのケースに、同期生大久保具視とのユニット「Mrs.Yuki」が育成する異なる色彩、模様の新しい変異体創造遺伝子「ポールバイソン」の本物の 4 つの個体と「アイムアダイバー」プロジェクトとして複数のアーティストの出自、遺伝の視点からのインタビューを通して生み出されたそれぞれの作家の作品を展示、創造の意味とその主体を問いかける。

村上真之介は、ギャラリースペースあるいはサイトスペシフィックな環境で様々なインスタレーションを行ってきている。しかし、そのスタイルは一定ではなく、彼の実感は扱う素材に近づく行為の中に見い出されるという。彼の前では 実体／リアル だけではなく、彼をとりまく風や光、さらに言葉までもそのモチーフとなり、さらに主題になるのである。以前の作品のタイトルに「風に路を用意する」というものがあった。今回は一体何が用意されるのであろうか。

[rgb⁺] 助手展も、昨年に引き続き 2 回目の開催となります。助手であり、それぞれがひとりの作家でもある彼らの仕事の中に〈リアル／リアリティ〉そしてさらにその表現の主体との相間に刺激を見い出す観者として、今展での大いなる、〈高昇〉を強く期待する。

2010 年 11 月 東京造形大学教授 母袋 俊也